街のシンボル サンタ・マリア聖堂と1604年完成の鐘楼

「マグダレナ」での伝統舞踊

闘牛場でのハイメ2世の戦の劇や乗馬競技の様子

夏用のセカンドハウスが立ち並ぶ「ベニカシム」のビーチ

これが“パエリャ”

スペイン王国 カステリョ・デ・ラ・プラーナ

高橋一彦さん
（編集ボランティア、東京都出身、現地法人勤務で2016年から4年間、スペインに滞在）

この街は地中海に面した、バレンシア州の地方都市です。バルセロナから高速列車で約2時間、第三の都市バレンシアの北約70㎞の位置にあります。

1251年に山の民が平野に移ることをアラゴン(注1)国王ハイメ1世が許可したことを街の起源とし、それにちなんだ祭り「マグダレナ」を毎年3月に10日間かけて行います。年一回の闘牛からパレード、伝統音楽・舞踊、伝統衣装を身に着けた女性たち、爆竹を鳴らす子どもたち、と騒々しくも華やいだ日々が続きます。

さて、スペインで最初に戸惑うのは生活時間の違いです。レストランはランチ14時から、ディナー20時半からで、逆に商店は14時から16時半までは閉まっています。食材も土曜日に入手しておかないと、日曜は店やレストランが休みなのでひもじい思いをすることになります。夏時間(注2)の7月、8月の間は日没が21時過ぎで、14時で終了する会社もあり、その期間15km程離れたベニカシムのビーチで暮らす住民が多くいます。毎日朝から働き、昼からワインを飲み、ゆっくり海岸で過ごし、遅めの夕食を楽しむ。なんとも羨ましい暮らしです。

次に、スペインの魅力の一つ「食」についてですが、ここでは何といっても“パエリャ”です。もともとバレンシアが発祥の地なので大変なこだわりがあります。“パエリャ”は具材が鶏、兎、カタツムリ、なた豆の米料理で、それ以外の具材の米料理は“パエリャ”とは呼びません。例えばシーフードパエリャなどは観光客向けの名前だと一笑に付されます。また食べるのは昼で、夜はレストランでも提供されません。とにかく“パエリャ”の話題になると家で誰が作るのかから始まり、いつも大盛り上がりです。

おしゃべりと飲むこと食べること、何より楽しく過ごすことを大切にする人たちの街です。

（注1）11世紀初頭から18世紀にかけてのイベリア半島東部の一王国。
（注2）夏季に限り、通常の標準時間を1時間進めた時刻。

INFORMATION

スペイン王国

面　積	506,000㎢
人　口	48,592,909人
首　都	マドリード
公用語	スペイン語

交流協会の取り組みにフォーカス！

災害時支援ボランティアの育成

川崎市国際交流協会では、2017年から災害時支援ボランティアの育成を行っています。今年は「災害時支援ボランティア養成セミナー」と題し、研修会を行いました。目的は、避難所での**ボランティアの役割を一緒に考え、外国人市民と日本人の間をつなぐ**ということを意識してもらうことです。

前半は、川崎市の防災出前講座を活用し、危機管理本部から「川崎市で想定される災害及び対策と避難所の開設などについて」の話を聞き、防災の意識を新たにすることができました。印象に残っているのは、避難行動の**マイ・タイムライン**という、一人ひとり家族や自分にあった避難行動（逃げ方）を考えておくということです。また、避難所のトイレの話は、とても切実で重要な課題であり、非常用トイレの備蓄は必須であることを実感しました。そして、外国人市民も参加してくれたことにより、防災関係の言葉は漢字が多く、難しい単語が多いということを改めて感じました。

後半は、（公財）仙台観光国際協会が作成した、多文化防災ワークショップのキットを使ってワークショップを行いました。避難所での外国人をまじえたトラブルのシナリオを読んで、どのグループも「言葉は一番の問題ではない」「歩み寄る」「寄り添う気持ちが大切」などたくさんの意見が出ており、いろいろな気づきができたようです。

多文化防災ワークショップの教材（状況イラスト）
作成：（公財）仙台観光国際協会

自分にも何かできるかもしれないと、参加者の中から10名を超える方が当協会の「災害時支援ボランティア」に登録されました。実際に避難所の体験もしてみたいという積極的な意見も頂きましたので、次年度以降の事業で検討したいと思っています。

（文・写真：川崎市国際交流協会 猿田由貴江）